

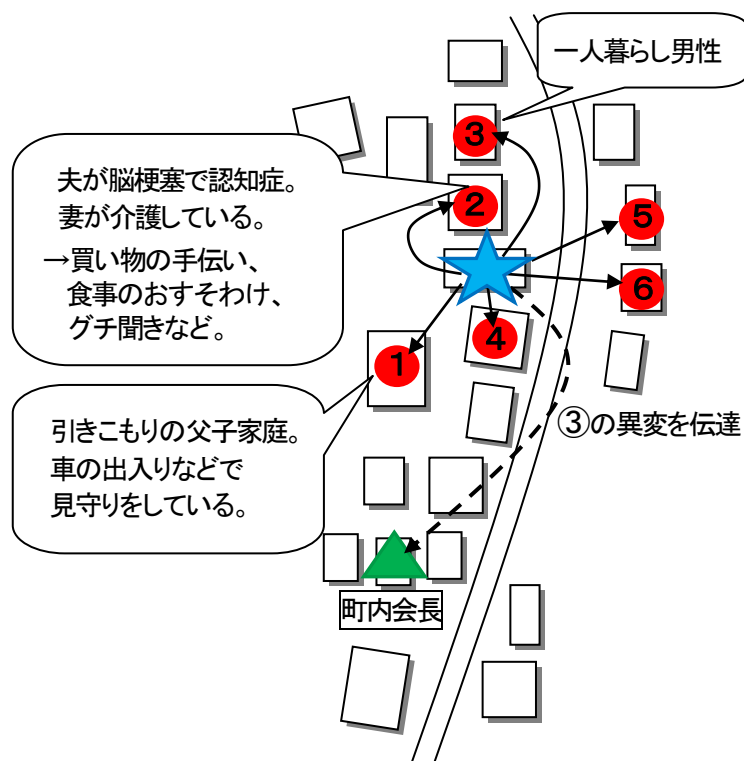
「見守り」という活動は本来ありません

■「分別主義」が、福祉活動を無力化している

(1)見守り活動は「ただ見る」だけなのか？

今なぜか「見守り」活動が盛んである。見守り講座も各地で開かれている。私も講義を頼まれて出かけている。そこで奇妙なことに気づいた。

活動事例の発表を聞いていると、確かに「見守り」は実行しているのだが、その後がない。「見守り」で終わりなのだ。見守りの中で、気になる人が見つかる。だからそのための活動が始まるのかと思いきや、活動はそれで終わりなのだ。「私たちは見守り活動をしているのだから、そこで気になることが生じても、それは別の種類の活動になる」ということのようなのである。「見守り」と「支援活動」は別物、というわけだ。



(2)見守りと問題対処が完全につながっている

前頁のマップを見ていただきたい。1人の世話焼きさんをご近所でどのように行動しているかがこれでわかるだろう。もう80歳近くで、体もだいぶ弱ってきたという一人暮らしのこの女性（星印）。それでも自分の周り十数軒の人たちの面倒を見ていた。①番は最近越して来たという引きこもりの父子。彼らをほぼ1日中見守っている。②番は要介護の夫を介護している女性。ご覧のようにいろいろ面倒を見ている。

③番は一人暮らし男性で、最近、異変に気付いたのですぐに町内会長に連絡した。この男性が最近、要介護になって、彼女はおむつ替えに通っている。それ以外にも④⑤⑥番の人に対してもいろいろ面倒を見ている。1人の大型世話焼きさんは周囲の10軒余の人たちのお世話をしている。

彼女にとっては、「見守り」という単独の活動はないようである。見守っていて、気になることが生じれば動き出す。見守りと支援活動が完全につながっている。この方が、自然なあり方ではないか。

(3)区分けされたら、両者はもう別物

では、どうして見守りだけの活動が全国規模で行われているのか。これが文明のいたずらというものである。文明は効率を求めて、対象を何でも、分別していく。分別できるものは、どこまでも細分化していく。そして区分けされた対象ごとに個別に集中的にかかわる。区分けされた相手方とはもうつながらない。

そのやり方は当然、福祉の他の営みにも適用されている。私たちの気づかぬ間に、様々な分野で分別が行われている。大事なポイントは、区分けされたら、両者は別物として扱われ、入り混じることはないということだ。そうやって「見守り」という1つの独立した活動が生まれた。

(4)普段のお付き合いはお付き合い。助け合いは別の機会に？

この分別作業が、福祉の様々な側面で実行されている。そして「これはこれ、あれはあれ」と、切り離してしまっている。

次の図を見ていただきたい。例えば日本人は、普段のお付き合いと助け合いを別のものと考えているようである。普段のお付き合いで助け合いの機会が出てきても、それには乗らない。助け合いはまた別の機会に、と言っている。ところがそんな機会は、いつ訪れるのか。というわけで、日本人の助け合いはいつまでたっても始まらない。

(5)助けと助けられの関係も、本来は限りなく曖昧

「助ける」と「助けられる」ことも、完全に別物と考えている。助ける人は助ける活動に専心

する。助けられる人は助けられる一方の存在だと。助け合いという言葉があるが、実際は助ける人と助けられる人が完全に分業している状態のことを言っているのだ。

例えば、助けられながらも、上手な助け方を指導したり、相手が助けやすい方法を工夫してあげれば、それもある種の「助け」にならないだろうか。少なくとも、助けと助けられの関係は、限りなく曖昧になっていくはずなのだ。住民は、誰かに助けられているとき、助けられる役割に没頭しているかという、そんなことはない。その中でお返しができる機会を必死に探しているはずだ。

(6)サービスも発展すれば限りなく両者の中間体になっていく

サービスと助け合いも、完全な別物と考えられているが、例えば有償サービスをやりながら、受ける方がお返しをする。それが拡大すると、サービスではなく、助け合いに変わっていく。

ある有償サービスグループは、料金を担い手と受け手の話し合いで決めていて、その後、受け手からのお返しが増えてきたりすると、料金設定は廃止して、純然たる助け合いに変わってくる。そうやって、助け合いの関係になったペアは、有償サービスの事業対象から外すのだ。

このように、有償サービスも柔軟に対処すれば、サービスと助け合いの中間体になっていくはずなのだ。

	問題対処
サービス	

以前、新聞にこんな投書があった。デイサービスセンターの職員が、たまたま利用者の嘆きを聞いてしまった。「毎日、『ありがとう、すまん』ばかり言うことに疲れた」と。これはまずいと、彼女は翌日、自分の赤ちゃんを連れてきて、高齢者たちに世話をお願いした。お礼を言うと、とて

も喜んだ。その後も所長の許可をもらって、毎日、赤ちゃんを連れて行っているのだと。

サービスにすれば相手は喜ぶだろうと考えるのは単純すぎる。やはり、人間は助け合いにしたいものなのだ。

(7)自助と互助は密接に結びついている

自助と互助の関係も、本来はファジーなものである。自助は、自分で自分の身を守ることだが、それができないから問題なのだ。だから本当の自助とは、周りの人の助けを上手に得ながら、自分の身の安全を図ることと考えた方が正しい。しかし助けてもらうには、自分もできることをしなければならない。

認知症の一人暮らしの女性が、自宅に周りの人を招いてサロンを開いていた。そこに集まる人に参加の理由を尋ねたら、「見守りがてら」と言っていた。

自分の身の安全を図るために福祉活動をする。自助と互助が一体となっている。だから最近では、純然たる自助という考え方は、廃れつつある。

(8)両者の中間のあいまいな部分で、極めて面白いことが起きるはず

物事を区分けするのは、ほどほどにしないと、損をすることになる。区分けしたために、両者の中間の曖昧な部分で、極めて面白いことが起きるはずなのを見逃す羽目になる。

ある会食会の現場であったこと。主催者が「次回のメニューは麻婆豆腐ですよ」と言うと、参加者の1人が「私、麻婆豆腐を作りたい」。もう1人が「俺んちは豆腐屋だから、豆腐を持ってくるよ」。すると主催者がピシヤリ、「だめですよ。作るのは私たちで、皆さんは食べる人ですからね」。これでみんな、シュンとなった。

私たちが担い手で、あなたたちが受け手、ということを徹底させようというわけだ。しかし参加者はそんなことに構わず、当事者の側からの発想を持ち出す。この動きをそのまま認めてしまえば、いわゆる食事サービスからはだんだん離れていくが、それでいいと思えば、最後はどこに到達するのか、興味深いではないか。区分けすることは、そうした現実の動きを封じ込めることになる。

(9)いっそのこと、すべての区分けを取り払ってしまったら？

今の福祉は、様々な区分けで成り立っている。まず推進者が存在することから始まる。そして担い手と受け手に分け、受け手をさらに障害の種類や要介護度などで分けて、特定の場を集める。

こう言うと、たしかに効率がいいように見えるが、効率がいいということと福祉効果があることは全く別物だ。担い手と受け手を区分けしたために、たとえば受け手にされた人たちの中に、有能な担い手になりうる人がいても、その人を無力化してしまうことになる。もったいない話ではな

いか。初めから終わりまで分けずやってみたらどうか。どうせなら、推進者とその他の人の分けもなくそう。そうやって、すべての分けをなくしていけば、そこから無尽蔵の資源が生まれ出るかもしれない。

(10)これが特別級の見守り上手さん

東京都西東京市の世話焼きさん・加々美京子さん(写真)に、見守りをどのようにやっているのか、聞き出したことがある。

彼女は毎朝、路上の掃除をしながら、「気になる家」を探す。自宅周辺はほぼ把握してしまったので、かなり遠くまで掃除をしに出かけていく。特に気をつけて見るのはゴミの出し方で、「気になる捨て方」をしている家を見つけると訪問し、様子を窺う。一人暮らしの高齢者、特に認知症の人は、それで分かるという。



「気になる人」の生活習慣、たとえば「この人は何時頃に風呂屋へ行く」といったことを把握し、その行動が見られなくなれば、様子を見に行く。

でも自分1人では見守りきれないので、気になる人を見つけたら、必ずその隣の家を訪問し(知らない家でも構わず!)、見守りを依頼する。異変に目を光らせてもらい、変化を察知したらすぐに連絡をもらって見に行く。24時間体制に近い状態で見守っている。これはほとんど「監視」と同じ。これぐらいしないと孤独死は防げないということだ。

面識のない「気になる人」や、なかなかドアを開けてくれない人については、常に意識して訪問の口実を探す。関係機関からの連絡事があったりした時に、ここぞと訪問するのだ。

そして「気になる人」に困り事が生じたら、必ず、すぐに解決してあげるといふ。それが相手の信頼を得ることにもつながるからだ。

要するに、これぐらいの「本気」でその人の安全を守ってあげようとしないと、だめだということだろう。

支え合いマップで、取り組み課題を見つける法

■頭の中に「仮説」をどっさり詰め込んでおくのがコツ

支え合いマップを作った後で感想を聞くと、「あまり問題が見つからなかった」というものが多い。「高齢者が多いのにびっくりした」とか「一人暮らしの高齢者が多かった」「老々世帯が多かった」というものが多いが、それは本人がそのことを知りたいと思ったから出てきたまでなのだ。

(1) 予測していた通りの事実が浮かび上がる

しかしそうした表面的な事実には驚いているだけでは、マップ作りの意味はない。例えば「一人暮らし高齢者で要援護になって息子の家に引き取られた人が、思っていたより多かった」。しかも「その人たちの大部分は、その後施設に入所していた」といったことがマップ作りで出てきたとすれば、これは成功と言える。福祉のあり方にまで踏み込んでいるからだ。

こういう事実がマップ作りの場に出てくるには、そういう質問をぶつけなければならない。そのためには、聴取者が頭の中で、「息子に引き取られた人が案外いるのではないか。しかもその後、施設に入所しているのではないか」という予測をする必要がある。

(2) 聴取者の頭の中は、様々な仮説で一杯であるはず

つまりマップ作りとは、聴取する側の頭の中に予め、「こういう問題があるかもしれない」という仮説がぎっしり詰まっていて、それを1つ1つぶつけることで当たりと外れが出てくることなのである。頭の中が空っぽのままマップ作りに取り組んでも、何も出てこない。

また、頭にあるものを片っ端からぶつけていけば、時間がいくらあっても足りない。その地域の状況を見て、ここにはこういう問題があるはずなのではないかと狙いを絞ってから聴取するのだ。

効率よく聞き出すためには、たとえば一人暮らし高齢者を探すときに、ついでに、その人に関連してありうる問題を一緒に聞いてしまうといい。

(3) 息子に引き取られた母は元の地域に戻ったのではないか

息子に引き取られた一人暮らしの親について、さらに深堀りをすることもできる。例えば、やっぱり元の地域に戻ったという事例はないかと聞いてみるのだ。すると、実に興味深い事例にぶつかった。

もうすでに息子の家に引き取られていったはずの認知症の女性が、元の地域をぶらぶらしているのを住民が見つけた。「おばあちゃん、こんなところで何をしているの」と聞いたら、「私の家はど

こでしょう？」と言う。あとで息子に聞いたら、訳が分かった。母親を自宅に引き取ったものの、母親は昔の家がいいと泣く。仕方がないから、2週に1回、以前住んでいた家に戻すことしたのだと。幸い、家は処分せずに残しておいた。

こんな事例も見つかった。地元ではボランティアをしていたという認知症の一人暮らしの女性。もう一人暮らしは無理だろうという息子の判断で、息子の家に引き取られた。その後どうしただろうか、その地域の人に聞くと、まだまだ元気で、ボランティアも続けているという。それなら元の地域に戻ってもらったらどうかという話になった。というのは、元の地域は、彼女が抜けたので、活動が下火になったというのだ。

(4)「事実は小説よりも奇なり」

というわけで、聴取者が地域に興味を持って、いろいろな質問をぶつければ、いくらでも話は続いていくことが分かるだろう。

「この地域は、これといった特徴がない」などという感想が、マップ作りの場に出てくるが、それこそ「事実は小説よりも奇なり」という例えのごとく、あなたのぶつける質問次第で、意外に面白い事実が出てくるものなのだ。